それをじっくり見る間もなく、「時間だ」と言われ、祖母の通いの寺で、遠い縁者でもある、近所の寺へ、お経をもらいに行った。

私は男四人兄弟の次男で、兄一人、弟二人いるが、兄貴と、末っ子の幹夫は仕事で都合つかず、宇治に住む三男坊の京太と私だけを中心にした、さびしい今日の法要となった。

法要の後、ジーパン姿に着替えた若い寺の住職をかこんで、少し奥の台所で雑談した後、門でお別れした。そして、納骨の為五条坂の西大谷へ向かった。西大谷には、私の母も父も、先祖代々、皆、いる。

納骨と参拝の後、私は、そこで皆とは別れた。小田原駅に停車するひかりはそう本数がない。まだ、六時二十一分のひかりには時間があるので、四条河原町は、高瀬川沿いの、昔から馴染みの、音楽喫茶店へ足を運んだ。戦前、母が働いた事もある、思い出深い店で、京都に来た時は、私は必ず立ち寄る。店の老女主人は古くからの母の友達で、今は娘さんの代になっている。店は、その当時の姿をそのまま、今に保存している。昔からあるフランス風の音楽喫茶である。コーヒーを飲みながら、一服した私は、「そうだ」と思い出し、京太から手渡された、私の昔の日記を、かばんから取り出した。

それは、私が中学三年の冬休み、暮れも押し迫った寒い夜、京都、四条河原町通りの本屋の店頭で、手にした日記帳だった。当時、私は人生初めての初恋の渦に巻かれ、苦しんでいた。まだ少年から青年への過渡期にあった私だったが、本能的に「初恋は絶対実らないもの」と、予感していたのか、それが恐ろしかったのか、「いずれ、皆、大人になると、そんなものは、きれい、さっぱり、忘れるよ」と言う、冷たい大人の言葉を信じたくなく、それに反抗するように、自分の思いを綴った日記だった。万一、自分が忘れる事があっても、この思いを少なくとも文字として永遠に残したいと切望し一途に書いた日記だった。

うす暗い店内の明かりの下で、まだ文体未熟な少年の字を、私は追った。

Candy
in the Heart
011

萩原良昭